参加者による記録

2012年1月7日(土)

報告：渡邉ひな子

18:00　事前研修会・結団式

今年のスタディーツァーは、羽田から夜行便を利用するため、事前研修会と懇親会を空港に直結した羽田エクセルホテル東急で18時から行い、21:30にチェックイン、00:15に出発となった。

事前研修会･懇親会　－メンバーの初顔合わせ

研修会／結団式では渡邉事務局長の挨拶、参加者全員の自己紹介後、アジア連帯委員会の歴史・活動概要、ラオス、タイの訪問先の説明等が説明され、その後、航空券等必要書類が各参加者に手渡された。また、日替わりで団長や記録係りを担当するため、訪問先での挨拶、記録、写真の役割を決め、挨拶をする訪問先へのお土産、JFEスチール労連寄贈文房具などを分担した。

最初は緊張気味だったメンバーも徐々に打ち解けた懇親会後、羽田国際空港行きシャトルバスで移動、JALの自動チェックイン機で各自、タイ・バンコクまでの搭乗券を発券、荷物は到着地ラオス・ヴィエンチャンまでスルーカーゴで送る手続きをおこなった。日付けが変わり、いよいよ空港に向けてCSAスタディーツァーの出発。

2012年1月8日(日)

報告：渡邉ひな子

JL033　00:15 羽田発 － 05:25　タイ バンコク

早朝、バンコク国際空港に到着後、ラオス航空乗り継ぎカウンターでヴィエンチャン行きQV424便の搭乗券発券手続きを済ませ、出発まで空港内を見学。

タイ･バンコク国際空港 － ラオス航空乗り継ぎカウンター前で
後列左から渡邉、村山、石川、橋本、三輪、前列左から西村、山﨑、西嶋、山中、佐﨑

QV424　09:35　バンコク発 － 10:20　ヴィエンチャン着

ヴィエンチャン空港では大形バスの出迎えにびっくり（今までは古いマイクロバス）！

フランス植民地であった頃の建物を改装したメルキュールホテルにチェックイン後、ラオスで初めての食事を街の食堂で。無事の到着を祝い、まずはBeer Laoで乾杯。

その後、ヴィエンチャンのシンボルともいえるタートルアン寺院、凱旋門などを視察。夜はメコン河沿いのレストランから対岸（タイ）を眺めつつ、翌日からの公式訪問の日程を確認し、視察の決意を新たにした。

ラオス麺で最初の昼食

2012年1月9日(月)

報告：石川　浩規

09:00　ラオス教育スポーツ省訪問

公式訪問１日目、ラオスに入国し最初の訪問先は教育省。連合本部・橋本さんを団長に、まずリー・フン中・高等教育局長と面会し、橋本団長の挨拶後、局長から挨拶を受け、質疑応答を行った。

◇リー・フン局長挨拶

ようこそラオスへいらっしゃいました。CSAの代表として毎年訪問して頂きありがとうございます。また、小学校の建設など多くの支援をして頂きありがとうございます。ラオスは30年以上の長い戦争があり、また地雷などの影響で発展が難しい状況だが、いままで日本から色々な支援を受けラオスの教育については発展してきています。感謝しています。日本の震災も大変だったと思います。日本の皆さんの事を思いとても心配していました。ぜひまた個人でもラオスへ来て下さい。

◇質疑応答

Ｑ１．高校や大学への進学率を上げる為に教育省としてどのように力を入れているか？

Ａ１．地方の村では最寄りの中学校まで20キロ～30キロ離れている。小学生全体の30%は中学校へ進学できず、親の仕事を手伝っているのが現状。中学から高校へ進学する場合に寮があると非常に助かる。高校の卒業生は全体で４万600人。その内半分は大学や専門学校へ進学する。その際、貧しい環境の者には奨学金を出して無料で学べる環境を作っている。中学校までの教育を政府として目標にしているが、学校の数が足りないのが現状。援助をもらっているがなかなか難しい。

リー・フン中高等局長に記念品を渡す橋本団長

Ｑ２．ラオスの一般的な教育事情は？

Ａ２．小学校５年間、中学校４年間、高校３年間の計12年間。幼稚園もあるが地方の村には無いので５歳から学校に行って勉強が

できる(プレスクール)。戦争後、政府が力を入れ中学校への進学率も高くなった。高校生で優秀な者は留学の機会もある。また数学・物理・化学などの教師が少なく、教師の教育レベルがまだ低い学校もある。教科書や教材も足りていないのが現状だし、運動具や楽器なども不足している。

その後ラオス教育省・センデュアン副大臣との面会が許可され別室に移動し、副大臣と懇談。橋本団長より今回のツアーの目的、また大震災時の義援金の御礼を挨拶し、副大臣より歓迎の挨拶を受けた。

◇センデュアン教育副大臣挨拶

政府また日本友好協会副会長として今回の訪問に感謝します。今後もより良い交流が図れることを期待します。CSAの支援はラオスの教育発展の為とても助かっています。震災時の義援金については、今までラオスの方が日本の政府やNGOから色々な支援をいただいたと思っており、今回の震災はラオスでも非常に悲しく思っていました。私自身も９月に青森へ訪問する機会があり、津波の被害等も確認し大変だと感じました。最近のニュースによると被災地が復興してきている様なので良かったと思っています。今回のスタディーツアーを通じて国・文化・教育の発展を見て行って下さい。

センデュアン教育副大臣と意見交換

◇橋本団長より質問

Ｑ１．教育事情での問題点は？　また教師毎の指導格差解消に対する政府としての支援策は？　又、学校の校舎を夜間・休日などに施設の運用としてNGOなどが利用する事はあるか？

Ａ１．教育事情で一番の問題は教科書不足。また教師達の本も足りていないのが現状。教師については地方と中央ではレベルが違うのは確か。CDなどを利用する教育を考えていきたい。校舎の利用についてはＮＧＯなどの使用は行われていない。中学校が不足しているので、教室を中学校として使用する事はある。

報告：西嶋　章乃

10:00　ラオス保健省訪問

教育省表敬訪問の後、すぐ近くの保健省へ向かった。立派な会議室が準備されており、ラオス保健省のインラバン・ケオブンファン副大臣との会談が始まった。

まずは、石川団長よりCSAの活動の趣　旨説明と一行の紹介と挨拶を行った。副　大臣から歓迎の挨拶とラオスの保健状況を伺った。

今年のラオスは特別寒いようで、中古衣類の毛布などが凄く役に立つとのこと。そして年々増えていることに凄く感謝しているとのこと。

「ラオスの保健状況として問題点はかなりある。子供たちの体が弱い(免疫力の無さ)。

食料などが不足し、単純に栄養のバランスが悪いので、病気が流行った際の抵抗力がない。

妊婦に関しては、10万人の中の300人が出産中に死亡している。0.3%の割合になる。山間部となると病院～自宅までが遠く、分娩直前に病院の近くに移送し、最悪の事態を免れるような手立てを早急に実行していく必要があるがそういう施設の建設に資金がだいぶかかる。

日本はこの100分の１程度。どこを基準にするかだが、自分のおかれている生活がどんなに恵まれているのかを痛感する数字だった。

石川団長より団を代表し挨拶

また1,000人中の45名は、１歳までに死亡、70名は５歳までに死亡というデータもあるようです。政府としてもこの割合が低くなるように努めていて、具体的にいうと、マラリヤやＳＩＤ(性感染症）が流行らないように啓発しているということ。」

啓発・啓蒙がどれぐらい行われているかとかはわからないが、私が感じた感想としては、マラリヤなどに対する民間の人の感覚は薄く、どこにいっても蚊は多いし、商店や家の門戸も開いたままだったりと気にしているとは思えない状況だった。通常の飲食店でもハエやコバエが沢山飛んでおり、日本人は意識しすぎかもしれないが、そこまでの意識がまだない国だと感じた。

保健省でインラバン副大臣と

そして、今後もっともっと啓蒙していかなければならないのが、健康に関する意識だろうと感じた。日本のように検査を先にするという概念がないようで、病気が見つかった時には、手遅れという状況も見受けられるそうだ。

そしてまだ地雷の不発弾が残っており、この影響で死亡者や負傷者がでることもあるそう。

並行し、男女レベルの平等に努めていくとのコメントも頂きました。現状では、田舎の女性はまだ立場などが弱いとのこと。なお、ラオスの平均寿命は55歳程度という状況で日本とはだいぶ違う状況だった。

11:00　保健省倉庫(救援衣類保管倉庫)

報告：渡邉ひな子

保健省訪問後、ヴィエンチャン市外にある保健省倉庫を訪問し、救援衣類を確認した。倉医療器具、薬品等の保管のために日本のODAで建設された倉庫に、CSAからの3,326ダンボール箱の衣類が10月末から保管され、地方に配送されている。救援衣類が確実に現地に渡り、仕分け・配送されていることを皆で確認した。箱にはラオス語表示が箱に貼られるようになり、とても助かっていることや、今年は洪水の被災者を中心に配布しているとの説明を受けた。山積みになったダンボール箱から、皆それぞれ自分の組織が発送した箱を探し、見つけた人は写真を撮った。

倉庫前で衣類贈呈式行われ、シサバット保健省官房副長官からあらためてCSAからの救援衣類への感謝の言葉が述べられた。

救援衣類贈呈式、村人も参加

しっかり届いていたことを確認した救援衣類

倉庫視察後、ヴィエンチャン市内有名レストランで、インラバン保健省副大臣の招待で昼食会が持たれた。正式なラオス料理を賞味させていただき、意見交換を行った。救援衣類を送る運動が評価･感謝されていることが伺われ、多くの方々のご支援をありがたく感じた。

報告：橋本　裕信

14:30　ヴィエンチャン県サイタニ郡 ホンガム村小学校（２番目校）

保健省の皆さんとの昼食交流会を楽しんだ後、午後はヴィエンチャン県の中心からおよそ20ｋｍに位置する、ホンガム村の小学校を訪問した。午後２時過ぎ、学校に到着した私たちを迎えたのは、予想もしていなかった学校総出の笑顔と拍手の嵐であり、正直圧倒されるような、照れるような、そんな気分で視察は始まった。

校長のカムクン・センダラー先生によれば、この学校には以前は近隣の３つの村から450名近い生徒が通っていたが、現在は村が一つ独立したため、新入生もこの10年でおよそ30％減少し、また、モン族の生涯出産数の高さも相まって、生徒に占めるモン族の割合も年々高くなってきている。

卒業生はこれまでに15回輩出しており、10年前に２㎞先の新しい中学校が創設されてからは、距離的な事情から通学を諦めざるを得なかった子どもたちにも、進学の選択肢が提示されることとなった。

CSAおよび連合を通じた支援は1996年から行われており、現在は小学校の通常授業に加え、文字を教えるためのプレスクールも開講している。３つある校舎のうち、最新のものは2004年に建造されたもので、こちらは政府予算と村人の動員により設立された。

なお、現在小学校で教えている先生方の半分はホンガム村小学校の卒業生であり、高校卒業後に専門学校へ進み、村に戻ってくる若者が多いとのこと。小学校の施設や器材の整備についても、先生方と村人の連携のもとで行われているとのこと。

校長より説明と依頼を受けた校舎

◆意見交換（小：ホンガム村小学校、Ｃ：CSA）

小）学校を設立した際に屋根はトタンにしたが、劣化すると雨の日にど

うしても漏れてきてしまう。プレスクールを優先して修繕しているが、いまだ完成はしていない。

C）CSAの支援で建造されたのは2番目に古い校舎なので、修繕の必要を感じる。

小）２番目の校舎にはシロアリ被害等は出ていないが、雨漏りは先生方がその都度直している。

C）資材（トタン）等を寄贈すれば、村人の主導で直すことは可能か。

小）昨年支援いただいた際の資金をもとに、現在プレスクールを修繕している。マンパワーについては現地から提供できる。

C）村長からの要請書も受け取った。
来年の予算で検討する。

意見交換の後、生徒との交流プログラムとして、低学年を対象に折り紙教室（ヨット）を、高学年とは綱引きをそれぞれ実施した。また、最後にCSAからの救援品として、色鉛筆やノートなどの学用品をお渡しして、ホンガム村小学校での視察を終えた。

折り紙教室・ヨットを折る

2012年1月10日(火)

報告：村山　長稔

09:00　在ラオス日本大使館表敬

在ラオス日本大使館ではカメラ、携帯電話の持ち込みが禁止されており、ロッカーへ預けることになり、その後、全員が空港にあるようなセキュリティーチェックを受けての入館となりました。防犯上から外観の撮影すら許可が下りず、写真が一枚もないのが残念です。

西村団長より訪問の目的と東北大震災の際にラオスから義援金をいただいたお礼の挨拶をし、今後も日本とラオスの友好のために頑張ることを伝えました。

冨田二等書記官に対応していただき、ラオスの現状について以下の内容の報告を受けました。

在ラオス日本大使館で対応して下さった冨田明子二等書記官

「ラオスは伝統的な親日国であり、半世紀以上の外交関係が続いており日本は最大の援助国となっている。良好的な二国間関係を背景に、協力関係が推進しており、内陸国にも関わらず国際捕鯨委員会に加盟しており、会議等では我が国を支持してくれている。

主要産業は農業で労働人口の7割が従事している。

教育関係では小学校は５年生制度になっており、入学率は高いが５年生卒業までいる率は68.4％（2008年）で、地方農村では学校へ行くより働くことを重視し、途中で退学する子供が多くなっている。また教員も少なく、レベルの高い教員は都市部で教鞭をとりたがり、地方の教育向上が難しい。

医療関係では乳幼児と妊産婦の死亡率が高いので、今後は死亡率を下げるため各県に診療所を作る事に力を入れていきたいが、高い技術を持った医師は地方へは行きたがらず医師を探すのに苦労している。平均寿命も短く30歳以下が人口の約７割となっている。

現在、ラオスは観光に力を入れており、世界遺産都市「ルアンプラバン」などへの外国人誘致に力を入れている。」

なお、当初の予定では地雷博物館を視察する予定でしたが、大使館の次の訪問先のターディンデンタイ村小学校訪問において子供たちや先生と折り紙作りや綱引きなどで非常に盛り上がり、楽しい時間を過ごしたために、閉館時間に間に合わず訪問中止になりました。

報告：佐﨑 吉宏

14:00　ヴィエンチャン特別市郊外サイタニ郡ターディンデンタイ村小学校（19番目校）

ヴィエンチャン市郊外にある村のターディンテンタイ村小学校の視察を行った。現地では、校長先生を始め対応いただいた。

小学校の外観

村の人口は、245家族、1985人（内女性987人）の村であり、近年、村の人口は増加しており、その理由はモン族の子供が増えているためである。（１家族の子どもが６人以上であり、多いところで13人のところもある。また、ラオス国内では正式に認められているわけではないが、モン族では一夫多妻制が認められている。）

小学校の生徒数は、372人（内女性182人）である。また、先生は12人（内女性７人）で今年、英語の新しい先生が２名入った。

この村の子供達は、100％小学校に行けており、これまでの卒業生は45名である。また、中学校への入学も、昨年45名、今年46名で100％入学している。

暑い時期は、勉強する時に大変であるため、出来れば扇風機を付けて欲しいとの要望があった。

最近、郡で試験を行い、９校中２位であった。（数学は得意だが、モン族（この村は100％がモン族）であるため国語が弱いとのこと）

校長先生からの村・小学校の概要説明の後、先生及び村長を始めとする村の人々に歓迎を受けた。その後、訪問団と生徒達との折り紙、更に生徒達の綱引き及び訪問団と先生チームと綱行き対抗戦を行い、交流を深めた。

授　業　風　景

生徒対抗の綱引き

報告：渡邉　ひな子

18:30 サンティパープ高校CSA寮卒寮生との交流会

ルアンプラバンにあるサンティパープ高校CSA寮を卒寮し、ヴィエンチャンのラオス国立大学に進学した卒寮生のうち21名との交流会が、ワッタイ空港内レストランで開催された。

高校寮卒寮生（ラオス大学生）と

参加した学生は全員、ルアンプラバンにある高校生支援のためのCSA寮を優秀な成績で卒業後、ラオス国立大学に進学し、経済学部、法学部、文学部、理学部、医学部等に在籍している。彼らは感謝の気持ちを表しつつ、学生生活や将来の夢などを目を輝かしつつ語ってくれた。また、私たちが「ラオスが大好きだ」ということを非常に喜び、愛国心の高さといった面も見せてくれた。スタディ・ツァー参加者からは、「大学で自分の目標に向かい熱心に専門の勉強に励む学生達と話をする事ができて嬉しかった」、「学生の純粋さに感動した」、「彼等にはこれからのラオスの発展を担ってもらいたい」等の感動に満ちた感想が述べられた。

2011年1月11日(水)

ルアンプラバンへ移動

9:30　ヴィエンチャン ～10:10　ルアンプラバン

報告：山中　貴雄

15:00　ルアンプラバン県ナムバク郡ホアナ小学校

ルアンプラバン市より約２時間半かけて山奥のナムバク郡ホアナ村に到着する。

文房具や衣類を贈呈

小学校ではカンフット校長（女性）、郡の教育局次長、村長らに対応いただいた。ホアナ村の人口は546世帯、3,202人であり村としては大きい。村には電気が通っており、また国道沿いであるため交通量が多く、商売がしやすいことから少数民族等が山奥から移住して来ている。そのため人口が増加し、児童数も増加している。

ホアナ村小学校はセントラル硝子労組が2000年に引き渡した寄贈校である。小学校の生徒数は639人、教師は15名、うち女教師が11名。12教室あるが、１学年平均50名の生徒がいるため、授業は半日ずつ２部制にしている。現在の悩みは教室不足が一番だが、運道具、遊戯道具もほとんどない。生徒はモン族が多いので、小学校入学前にラオス語を学ぶプレスクールが必要。３年生からこの小学校で勉強しているとのこと。また教師も不足しているとのことであった。

卒業率は96%であり、そのうち99%が中学校に進学する。中学校は３キロ離れている。ナムバク郡は83村、10グループで構成されており、ホアナ村のグループには高校、

中学校が各1校ずつあるが、中学進学希望者は2,500人で、来年は3,000人になるため中学校校舎も不足している。

CSA訪問団を代表し、三菱重工労組の佐﨑団長より挨拶があった。挨拶後、救援衣類ならびに文房具、サッカーボール、綱などの贈呈式が行われた。

式典後、ラオスの風習に従い、CSA訪問団への歓迎と道中の無事・健康を祈ってのバーシー儀式が実施され、先生方や村の人々から大歓迎を受けた。

小学校でのラオス伝統の歓迎儀式バーシー

村の人々は、日本の震災を気にかけてくれており、村で義援金を集め、教育省に届けたという話であり、CSAを通じた支援に大変感謝をしていることがうかがわれた。

2012年1月12日(木)

報告：西村　正雄

10:30　サンティパープ高校寮視察

サンティパープ高校にはホテルから近いのですぐに到着した。ヴィエンチャンで訪問した小学校と比べると、サンティパープ高校は比較的都会にある様子である。

到着すると、寮生と先生たちが出迎えてくださり、食堂に移動してセレモニーが行われた。セレモニーではスントーン校長や先生たちのほか、保健省のシサバット官房長も訪れ、我々への感謝の言葉を述べ、我々の代表、IHI労連の三輪団長の挨拶の後、衣類等の贈呈式があった。

関係各位から、日本の連合の皆様への御礼の言葉、日本の震災後、ラオス国民個人でも文部省への寄付等行っていること、また高校寮に個人できていただいてもかまわないのでぜひまた来ていただきたいとの歓迎の言葉をいただいた。

現在、寮では90名の寮生が暮らしており、１年生30人(内女性７人)、２年生30人(内女性４人)、３年生30人(内女性７人）女性計18人の内訳である。

挨拶にあたり、校長から優秀な生徒を選抜する全国大会があり、寮生たちも勉強に励んでいることや、日本からの支援について皆非常に感謝しており、寮生もそれに答えるべく頑張っていることの説明があった。また、これからも若い人たちにも頑張ってもらい、日本との友好の為にも勉強しなければならないことも思っておられた。

高　校　寮　の　前　で

衣類の贈呈にあたり、生徒の嬉しそうな様子が伺え、私たちが送った衣類が確実に役に立っていることを感じ取れた。

その後、寮生によるラオスの踊りの披露があり、綺麗な衣装での様々な民族の踊りを披露していただいた。スタディツァー・メンバーにも踊りの参加の要請があり、私たちも音楽に合わせて高校生と一緒に見よう見真似で踊ったが、言葉は通じな

くても、踊りを通じて何か通じるものがある様子が感じ取れた。また踊りの後は、演劇や寮生のテコンドーの披露があり、１年生から３年生まで、素晴らしい技を披露していただき、特に上級生は高所の板を背面飛びで割るといった離れ業も披露してもらった。

その後、全員参加でCSA訪問団への歓迎と道中の無事・健康を祈ってのバーシー・セレモニーを行ってもらい、手首に紐をたくさん結んでいただいた。

女子学生による民族舞踊

最後は寮生の部屋を各階を見学させて貰った。部屋は６人部屋で共同生活をしており、炊事、掃除、買い物も当番制でするなど、完全自立をしていた。部屋はあまり広くなく、狭い中での個人スペースで勉強をしており、狭い中でも一生懸命に勉強している様子が伺い取れた。

報告：渡邉　ひな子

バンコクへ移動

16:10　PG946　ルアンプラバン国際空港発　18:10タイ国際空港着

フライトはスムースにタイのスワナプーム国際空港に到着して一安心。が、タイ入国管理カウンターは人が溢れんばかりの混雑、おまけにカウンターには職員が少ない！　結局入国は約２時間半後。夜のバンコクの街並みとラオスの違いをマイクロバスの窓から実感しつつホテルにチェックイン。その後、Beer Laoを懐かしみつつ、タイガー、ハイネッケン、シンハーなどタイビールとタイしゃぶしゃぶで移動と入管手続きの疲れを癒しました。明日はいよいよタイの視察です。

2012年1月13日(金)

報告：山﨑　友美

10：00　在タイ日本国大使館　表敬訪問

バンコク特有の渋滞を考慮し、時間に余裕を持ってホテルを出発した。

大使館の規模や防犯カメラの位置を外部に漏らさないようにするといったテロ対策のため、カメラ・携帯電話の持ち込みは禁止であった。

まず、私たちを代表して三井造船労働組合連合会 山中団長から挨拶を申し上げた。名刺交換後、社会経済活動を担当されている伊藤一等書記官よりタイの事情と方向性について下記の内容をご説明いただいた。伊藤書記官は電力総連出身であり、連合から外務省在外公館へ派遣されている。

タイ日本国大使館前で伊藤一等書記官と

（経済）

・GDPは10.1兆バーツ(3,190億ドル)

であり世界第34位、（1人あたりGDPは第92位）と先進国未満、発展途上国以上である
・無償のODAは1993年に卒業している
・失業率は１％で完全雇用と言われている中で0.8%であり、2012年度には最低賃金を全国一律40%引き上げる予定。企業は猛反発のため代わりに法人税を引き下げることで交渉を行っている
・タイ人労働者の１割は日系企業で働いている

（洪水）

・７つの工業団地で浸水被害が発生し、約720社が被害を受けた。その内450社は日系企業である
・報道では工業地帯ばかりが取り上げられているが、農家への被害も大きい。
・水は落ち着いたが、民家の脇などに未だに溜まっている水の酸素濃度が低下し腐った臭いを放っており、コレラやデング熱等の発生を危惧している

最後にタイの教育状況についてお伺いしたところ、基礎教育へのアクセスはほぼ出来ているとの事であった。

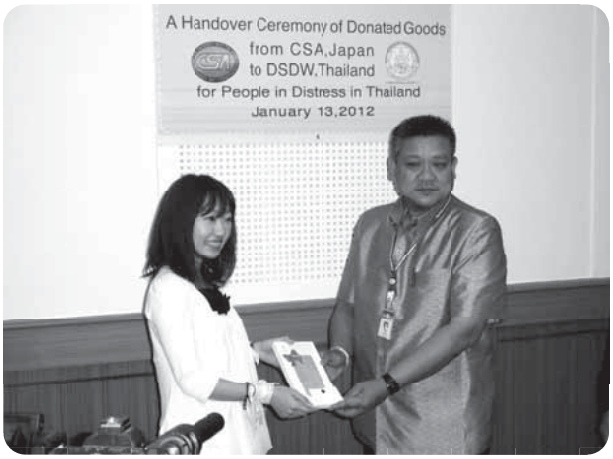
報告：三輪　明洋

14:00～　タイ社会福祉省表敬訪問。倉庫視察

ツアー最終日の午後。14：00からタイ社会福祉省表敬訪問・倉庫視察。

ビデオによる2011年度CSA救援衣類活動の様子が紹介され、昨年の11/17～20にかけて6,499箱、40Ftコンテナ10個分、1,296万バーツ(3,024万円）相当の救援衣類が日本より贈与されたと報告があった。

その後、各自名刺交換、参加者全員の自己紹介、山崎団長の挨拶に続いて、副大臣から；



タイ社会開発福祉省における衣類贈呈式

・タイ国民に対する日本からの支援に感謝申し上げる。
・私たちは、血、国籍、土地も違うがこの活動に対して今後も頑張って取り組んで行きたい。
・CSAから送られた寄付・物資は、すぐに貧困で苦しんでいる人々にCSAに代わって配布している。
・この活動は、物資を支援するだけでなく自立することを目的に行っています。

今回の訪問に感謝すると共に、CSA の目的とする復興・支援に対して私たちも一体となって今後も取り組んで行きます。」との挨拶があり、双方の記念品を交換した。

○タイ社会開発福祉省倉庫（救援衣類保管倉庫）

その後移動し、社会開発福祉省が所管する救援衣類保管倉庫を訪問し、CSAからの救援衣類を確認。

救援衣類の段ボールは倉庫で開封され、男女・大人・子供といった内容別に仕分けがされ、保管されたのち各地域に袋積めされ送られているとの説明を受けた。最後に、西

村団長より倉庫スタッフに記念品を贈呈し労をねぎらった。

西村団長より衣類倉庫スタッフを労う

18:00～　お別れ夕食会

最後は連合主催によるお別れ夕食会を空港へ行く途中のレストランで。

タイ日本国大使館の伊藤一等書記官にも駆けつけていただき、一週間の反省や日本へのお土産話など、楽しい時間を過ごさていただきました。

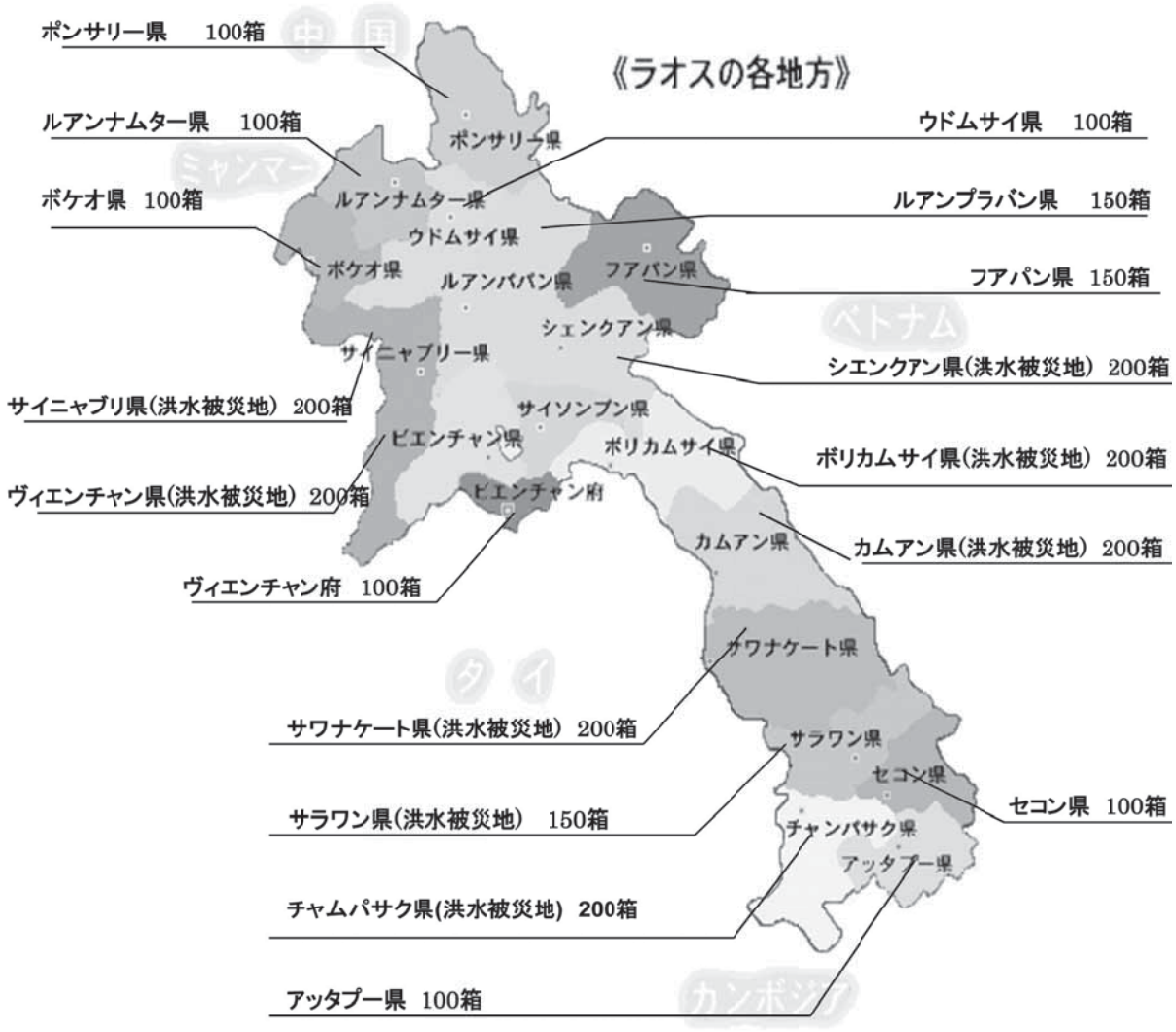
スタディー・ツァー最後の晩餐 ー 伊藤書記官も参加

2012年1月14日(土)

07:05　成田空港着

全員無事に入国審査を済ませ、渡邉事務局長の解団宣言後、それぞれお疲れ様を言い合い、再会を誓い、各自帰路に着きました。皆様、大変お疲れ様でした。

2011年第28次救援衣類を送る運動
ラオスにいただいた衣類の配布先



他省庁を通じて配布

国会	100箱
総理府	100箱
労働社会福祉省	150箱
教育省	250箱

バーシー・セレモニー

バーシーは、ラオスの人々が結婚式等様々な祝い事、歓送迎などに行う儀式で、村の長老の祈りとともに手首に白ないしオレンジ色の糸を結びつけ、健康や人生の成功などを願う儀式です。部屋の真ん中に飾られたバーシーのお膳には、お米の入った托鉢用の鉢、丸ごとゆでた鶏、ゆで卵、バナナ、お菓子などが盛られ、花やバナナの葉をつなげて竹ひごに刺した長い飾り（時々造花で代用）と、白い木綿糸が1本ずつ房のように結ばれた細い竹ひごが飾られています。多くの場合はその村の長老が祈祷師の役割を務めます。長老が祈祷後、来賓の一人一人に祈りを唱えつつ糸を手首に結び、来賓はバナナ、鶏肉等を手に持ち祝福を受けます。その後、他の村人たちが来賓の手首に健康、成功、旅の安全などを祈りながら糸を巻いてくれます。

ターディンデンタイ村の大長老と長老

ラオ･ラーオというラオスの地酒（50℃近い）をまず主役（来賓代表）が全部飲み干さなければなりません。その後、順次ラオ･ラーオが注がれ、来賓全員が飲んだあと、参加した村人たちも飲み始めます。何回も勧められ、そのたびに飲み干すのは大変です。

ホアナ村のバーシー儀式

CSAワーキングスタディーツァーが小学校、高校寮などを訪問する際、歓迎の意を込めたバーシー儀式がよく催されます。村人は朝早くから、飼っている鶏などの料理や儀式を準備し、子どもたちが学校で勉強できるようになったことや衣類を贈られたことへの感謝の気持ちを表してくれます。手首に巻いた糸は切ってはならず３日間はつけておく、といわれていますが、村人や生徒たちの気持ちのこもった糸は自然に切れるのを待ちたくなります。

サンティパーブ高校寮では生徒も参加